

ティムール大帝の都サマルカンド ウズベキスタン

JICAの仕事でソ連（ロシア）から独立間もないウズベキスタンへ派遣された。初めて公用旅券を頂戴し責任の重さを思うといささか緊張した。与えられたテーマは「生産性と労使関係」である。日本がウズベキスタンの各界のリーダーを対象に「重要政策中枢支援協力～市場経済推進のための人材育成」プロジェクトを実施するにあたり、その一端を担当することになったのである。

ウズベキスタンはソ連圏の中では優等生で、金の産出や綿花生産は世界の中でもトップクラスであったし石油等の埋蔵も確認され資源豊かな国である。

首都タシケントは活気に満ち、巨大な市場は品物や人で溢れかえっている。スターリンの政策として沿海地帯の朝鮮族を、二重内陸国であるここウズベキスタンへ移住させた。そのため朝鮮族を多く見かけ、食事は脂のきついウズベク料理の他、日本人にもなじみの深いキムチや焼き肉いわゆる朝鮮料理が味わえる。ウズベキスタンの主食は米や“ノン”と呼ぶ美味しいパンである。

タシケントは1966年の大地震により古い建物は倒壊し新都市計画の下に再建され、真新しいビルが建ち外見は近代都市の様相である。

JICAの配慮で世話役にファルー君という大学生を案内役につけてもらった。彼は優秀で日本語が堪能であり、日本大使館の実施した日本への留学生試験で抜群の成績を収めたそうだ。人柄もよくこういう人材を多く抱えているウズベキスタンの未来は明るいと感じたものである。



ティムール像

休日を利用して文明の十字路口といわれるサマルカンドを訪れた。サマルカンドは世界史で学び以来いつか尋ねてみたかったところである。世界史の授業の時ゾロアスター教（拝火教）のくだりを聴いた。

かつて家庭で使う電球にはマツダと銘打ってあったが、マツダという名前は拝火教の最高神アフラムツダからとったそうだ。以来ソグド人、ティムール、サマルカンドの文字は記憶の底でくすぶり続けた。

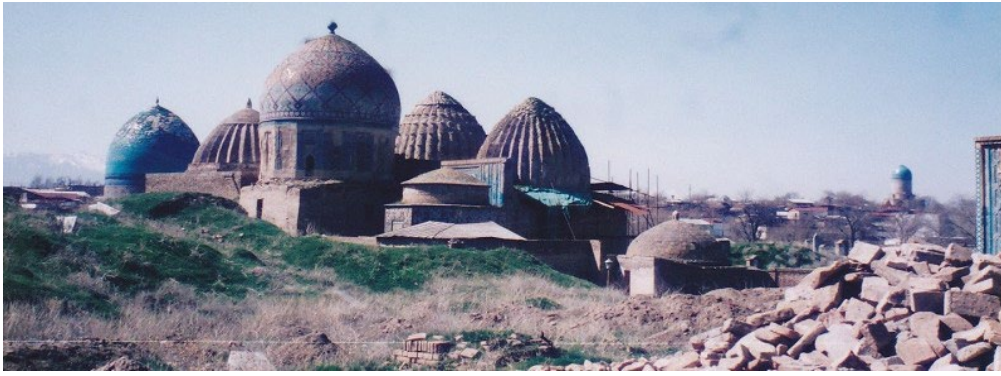
タシケントからサマルカンドへは現在高速鉄道で2時間ほどだが、1998年当時は車で4時間半ほどかかった。舗装道路であるが補修されず、穴だらけのひどい道路であった。300kmの間信号らしきものは無く、無論ドライブインなど全く見当たらずどこまで行っても草原と土漠の緩やかな丘の連なりをひたすら走った。



タシケントからサマルカンドへの道

サマルカンドへ近づいたとき遠くに真っ白な雪山が見えてきたのが印象的であった。タシケントに比べるとサマルカンドはいかにも古都の趣に満ち青いタイルが目にし、青の都と称されていることを実感した。郊外では遺跡発掘が続けられている。サマルカンドは見

どころの多い所であるが、特に惹かれたのは王家の霊廟群シャヒージンダである。タイルが剥がれ落ちひどく荒れた印象であったが、最近のビデオなどを見るときれいに補修され見違えるような美



サマルカンドの街への入口 青の都サマルカンドはタイルも剥げ落ち



ティムールの廟 グル・エミール



ティムールの棺

しいたはずまいとなっていた。

グル・エミールは英雄ティムールの廟であるがよく整備されていた。

タイル張りの門を潜り建屋に入ると石の棺が置いてある。ティムールの棺だと説明をうけた。

出口を出ると男が小声で本当のティムールの棺は地下にあるが案内料を出せというので、疑いつつながしかの金額を渡し案内された。殺風景な部屋には棺だけが置かれこれが本物だと告げられた。

ティムールの右足は戦闘中に負傷し不自由であったと伝えられているが、1941年ソ連（現ロシア）の学術チームが、ティムールの遺体を検証したところ右足にいくつかの傷があり、いい伝え通りティムールの遺体であることが立証されたようだ。

サマルカンドのある中央アジア一帯は非常に肥沃な地で、中国、西アジア、インドなどを結ぶ重要な交通の十字路でもある。紀元前10世紀ごろにはイラン系のソグド人が住んでいた。ソグド人の宗教はゾロアスター教であった。紀元前4世紀にマケドニア、現在のギリシャのアレキサンダー大王が中央アジアへ軍をすすめてソグディアナ、今のサマルカンド地方一帯を征服したのである。

708年ソグド人の支配地域へ、ウマイヤ朝（イスラム教の預言者ムハンマドの一族でウマイヤ家による世襲王朝で、シリアのダマスカスに都を置いたアラブによる初期イスラム王朝）が、サマルカンドに攻め入り支配下に治めた。9世紀頃から中央アジア一帯はトルコ化しイスラム化していく。1220年モンゴル人チンギス・ハーンが中央アジアを席卷し、最大の都市サマルカンドを総攻撃し徹底的に破壊し尽くし廃墟にした。チンギス・ハーンの征西により中央アジア全てがモンゴル人支配となる。

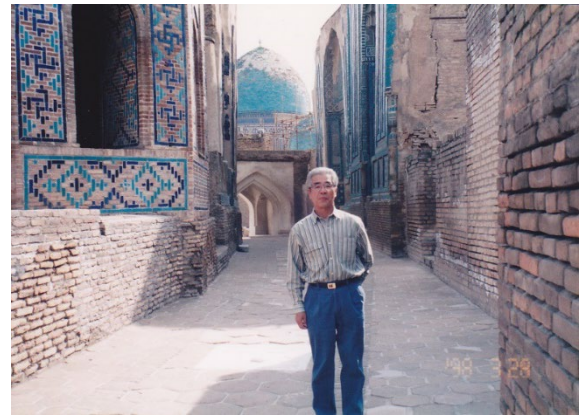
チンギス・ハーン亡き後、その末裔のチャガタイ、オゴタイが相続をめぐって争うことを繰り返した。定住化するグループと遊牧するグループとは生活対応が異なるなどの違いがあり一つにはまとまりにくく小競り合いが長く続いた。

14世紀には中央アジアは群雄割拠の状態であったが、ティムールが一頭抜きんで西アジア一帯の覇者となりサマルカンドを再建し都と定めた。ティムールは強敵オスマントルコに勝利した。ティムールはモンゴル人であったが部下の兵はトルコ人が主体であった。ティムールの時代にイス

ラム文化が盛んとなった。



王族の廟 シャヒージンダ



美しい外壁が剥がれ落ち物悲しい

ティムール ティムール王国の建国者（1336年4月9日～1405年2月18日）  
サマルカンド近郷のイスラム化したモンゴル族の地方豪族の家に生まれ、イスラム教の信者でありながら、一方では戒律には従わないところもあった。若いころは羊や馬の略奪を生業にしていたが、仲間たちからその力量とリーダーシップを買われ次第に頭角を現し実力者にのし上がっていく。そして西アジアの強大な国家オスマントルコ軍に戦勝するなど数多くの戦に勝利しながら、1370年イスラム教を国教とする広大なティムール王国をうち建てサマルカンドを都にさだめた。ここに強大なティムール国家が誕生したのである。

1381年ペルシャへ遠征した後、アフガニスタン全域を支配下に置き、さらにイラクを占領。

1386年西アジアへ遠征を開始し、グルジアを攻撃しシリアへ進出する。次いでトルコ、コーカサス地方へも進軍する。アルメニアを征服し、1392年には西アジア遠征を再開しバクダートを支配下におさめる。また更にインドへ軍事遠征をおこない、69歳で没するまで絶え間なく戦、遠征を繰り返した。ティムールは強敵オスマントルコを撃破、小アジア・インド・エジプト・アフガニスタン・アゼルバイジャン・アルメニア・グルジア・シリア・ヨハネ騎士団が領有する現イズミールなど広大な地域に侵攻した。

ティムールの遠征は抵抗する敵にはすさまじい破壊と殺戮を加え恐れられながら一方では恭順の意を表す相手には財貨は獲るが放任した。

1405年イスラム教の聖戦であると大義を掲げ、中国を討つため進軍中病を得た。生涯戦に明け暮れた英雄は69歳で人生の幕を閉じたのである。



町はずれから見たサマルカンド

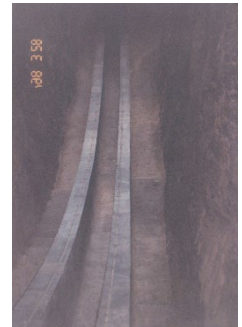


レギスタン広場 イスラム神学校メドレセ

その後ティムールの孫であるウルグ・ベクの時代にはティムール帝国の最盛期を迎えた。ウルグ・ベクは中国の明朝やオスマントルコとも関係を修復しながら東西交易を盛んとし国力が富んだ。ウルグ・ベクはティムール帝国の君主であるとともに、当代一流の天文学者でもあり、1420年彼の建設した天文台から得られたデータは極めて正確で後年高い評価を得ている。天文台は長い間



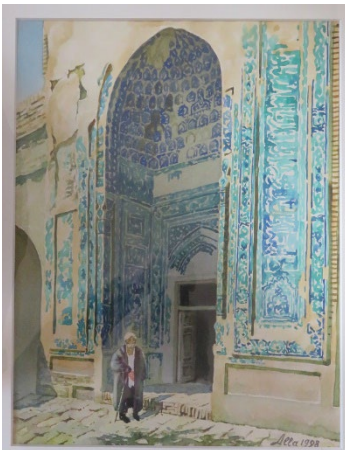
ウルグ・ベクの天文台



地下の観測アーチ

地中に埋もれていたが、1908年観測に使用したアーチが発見された。

1500年ティムール帝国はイランによって破壊され滅び、その後草原地帯のトルコ系遊牧民がウズベクへ侵入しはじめ一大勢力となり今日に至っている。



サマルカンドのシャヒージンダ廟を題材にした絵を記念に求めた。長年月の間に外壁のタイルが剥がれ落ち栄枯衰勢を強く感じる。